



## ■ 開講クラスについて

——従来との変更点・「予備調査」のお願いについて——

### (1) 「やまびこクラブ」開設！

「ひねもす教室」、「カプラ教室」は、遊びの体験教室「やまびこクラブ」(後述します)に統合します(参加費無料)。

ひねもす、カプラも含め、子どもたちが、とことん納得いくまで「遊び込む」夢のようなイベントを月に一度、幼稚園のスタッフで企画し、運営しますので、是非お誘い合わせの上ご参加下さい(対象は小学生——会員以外のお子さんも奮ってご参加下さい。詳細は、毎回事前に発表します)

### (2) 「ことば」クラスを増設！

「ことば」クラスを低・高学年とも2クラスを増設をいたします(火曜日と水曜日、午後4時10分～5時10分)。

また中学生の「英語」「数学」のクラスは、学年別に会員を募集します。

### (3) 予備調査 実施について

開講クラスとその曜日については、「予備調査」の結果をもとに最終的に決めたいと思います。「新規」、「継続」の別を問わず、3月18日までに提出下さいますようお願い致します(持参、郵送、FAX、電子メールの別を問いません)。

3月20日の説明会にて、開講クラス・開講曜日について最終決定事項を発表致します(この日の説明会に欠席された方には3月22日までに郵送にて通知します。)

なお、予備調査は正式なお申し込みではありません。参加予定者数が一定数に満たない場合、クラスの開講を見合わせる場合もあります。この点をあらかじめお含み置き下さい。

## ■ 平成16年度「春学期」について

(1) 新年度より、4月～7月の期間を「春学期」、8月～11月の期間を「秋学期」、12月～3月の期間を「冬学期」と呼ぶこととします。それぞれの学期ごとに開講クラスと担当講師の見直しを行い、その都度事前に発表することに致します。

(2) 年間を通じて、各々の学期ごとに14回の授業を行う予定です。

(3) 平成16年度「春学期」のスケジュールは下記の通りです。

火曜日クラス：4月6日～7月13日    水曜日クラス：4月7日～7月14日  
木曜日クラス：4月8日～7月15日    金曜日クラス：4月9日～7月9日

## ■ 入会の手続きについて

(1) 幼稚園（園長室）までお越しになる場合：

1. 3月20日の「説明会」にご出席の場合、その場でご用意する「入会申込書」に必要事項をご記入の上、会費をお納め下さい。
2. 3月20日の「説明会」ご参加がご無理な場合、(1)3月22日～24日、(2)4月5日以降に園長室にてお取り扱いさせていただきます。  
※「入会申込書」は園にてご用意しています。

(2) 幼稚園（園長室）までお越しになれない場合：

1. 「予備調査」にお返事下さった方には、「入会申込書」を郵送させていただきます。申込用紙に必要事項をご明記の上、郵送・FAXまたはe-mailにてお申し込み下さい。
2. 会費につきましては、下記口座にお振り込み下さい（恐れ入りますが、振込み手数料はご負担下さい）。  
京都中央信用金庫 錦林（キンリン）支店 普通 2217927  
名義：学校法人北白川学園 理事長山下太郎

※「継続」の方も、入会申込書のご提出をお忘れなきようお願い致します。  
※入会の募集は各クラスとも定員に達するまで行うこととします（先着順）。

## ■ 入会費用について

**入会金** : 小学生 6,000円 中学生 8,000円 高校生・一般 10,000円  
継続の方・休会されていた方は、入会金は不要となります。

**入会金割引** : ご家族で同時に入会される場合、入会金はお一人分（最年長の方の分）のみとさせていただきます。

**会費** : 各学期、1クラスにつき、  
小学生 24,000円 中学生 32,000円  
高校生・一般 40,000円（プリント代含む）。

**会費割引** : 2科目受講時→1科目につき 4,000円減額（計8,000円減額）  
3科目受講時→1科目につき 8,000円減額（計24,000円減額）  
4科目受講時→1科目につき 12,000円減額（計48,000円減額）

例) 小学生の部で、「しぜん」と「ことば」（計2科目）を選択  
→各24,000円、計48,000円のところ、計40,000円となります。

# クラス紹介

## ——小校生の部——

### 『ことば』

日本語を読み書きする能力は、すべての勉強の基礎になります。時には読み聞かせを通して、時には作文の添削を通して、日本語を正確に理解し、表現する力を養います。漢字の書き取り、音読、暗唱も大切な学習ポイントです。低学年（1、2年生）と高学年（3～6年生）の2つのクラスに分かれて学習します。

### 『しぜん』

幼稚園のまわりは生きた教科書そのものです。あたりを見渡せば四季折々の花、樹木、昆虫がいっぱい見えてきます。子どもの弾んだ心に、仲間と一緒に五感を使って多くの自然の感動を刻み、生きる力をはぐくむのが目的です。

自然は動いていますので、学習予定表はありません。テーマを決め毎回がイベントです。「今日はなにがあるかな？」と、楽しみにして下さい。低学年（1、2年生）と高学年（3～6年生）の2つのクラスに分かれて学習します。

### 『かず』

計算力（正確に速く計算する力）をしっかりと身に付けていただくためのクラスです。個々の力に応じたプリントを用意し、学校で勉強する内容を確実に習得できるように指導します。低学年（1、2年生）と高学年（3～6年生）の2つのクラスに分かれて学習します。

## ——中学生の部——

### 『英語』（各学年）

中学で習う英文法の大事さは、高校以上になってから痛感するものです。各学年で学ぶ必修文法事項を例文とともにしっかりと暗記し、日本語から英語に瞬間的に直せるようにトレーニングを重ねます。

### 『数の基本』（各学年）

中学校で習う数学の基礎が確実に身につくよう指導します。各自で学校の教科書をご持参ください。一人一人に合った勉強のメニューを決め、それに即して学習を進めていきます。各学年に分かれて学習します。

### 『数の世界』

数学には宇宙の未知を探るなどのさまざまな魅力があります。けれども小・中・高校生が学校で習うべき数学はそれと違って、体系づけられた既知のものです。しかしそこになお語るべき「古

典」の魅力を知れば、どんなにか学校が大事なことを教えているか気付くでしょう。——ここでは、『数学が生まれる物語』（志賀浩二著）を使用します。丹念に通読し、質問ごとに立ち止まって、数学の興味を引き出します。

## 『日本語の読み書き』

片言の日本語は話せても、自分の意見を筋道たてて発表できない子どもたちが最近増えています。文学作品にかぎらず、さまざまなジャンルの日本文を読みながら、その大意を要約したり、その内容を口頭で他人にわかりやすく説明したり、自分の意見や感想を書いてもらうことで、作文能力と読解能力を鍛えます。

——高校生・一般の部——

## 『英語の読み書き』

俗に言う「英語の基本」とは中学時代に習う英語の知識を指していますが、それを今後の人生で生きた知識として活用できるかどうかは高校時代の勉強にかかっています。英文の内容を要約したり、それに対する自分の意見を英文で書いてもらったりします。ねらいは、英語の作文能力——和文英訳でなく自分の英文を書く力——と読解能力を鍛えることにあります。

## 『数と自然』

自然科学の論理的思考は、将来どのような分野に進む生徒にとっても必須のものと言えます。このクラスでは、数学を中心として論理的に思考し、ものごとを理解することの喜びを感じてもらうことを目標としています。また、物理、化学、生物といった自然科学のトピックの中から興味深いものを選び、最先端の科学に触れることの楽しさやそのための知識を身につけてもらいたいと考えています。

## 『日本語の読み書き』

幅広いジャンルの日本語を精読、多読します。将来の心の糧となる古典を読解することも含まれます。古今東西の作品を読みながらその普遍的価値を発見し、その成果を自ら文章によって表現、発表できるよう指導します。

## 『ラテン語』

西洋文化の源流としてのギリシア・ローマ文化は、ラテン語のおかげで現代に息づいているとあって過言ではありません。英語アレルギーの方にとっても、欧米の言語のルーツがこんなにも日本人にとって親しみやすいものかと驚かれることでしょう。ラテン語に興味のある方はもちろん、なんとなく面白そうだと思う方も、ぜひ一緒にラテン語の勉強を始めましょう。高校生も歓迎します。

# 『やまびこクラブ』 ——フリー体験教室

金曜日 4:00~5:30 (月末)

---

スローな「むかし遊び」に、いっしょにはまろう！

## 1話「今日は『やまびこ』の日だけ」の巻

A「ヒコーキって、いいよなあ…」

B「え？」

A「おれ、高いところからさ、紙ヒコーキ、うんと飛ばしてみたいなあ…」

(ジャングルジムが目に入り)

B「そんならさ。…ほら、あの上からは？」

A「でも、おれひとりってのもなあ…」

ため息。

C「ねえ、わたしこないだね、妹のようちえんで、竹馬作りにいったんの。それでね…」

A「ようちえん？」

C「うん。おやまの」

B「わたし竹馬って、見たことない。乗れる？」

C「うん。昨日そうそう、それでね、乗れるようになったの」

B「へえ…すごーい！」

D「なあなあ、おれ、うちで『けん玉』見つけたんやで」

B「え、できるん？」

D「…ん？ うん、まあ…ね」

A「おれ、モシカメやったら知ってるし、見せたるか？ あ、でも、おれ持ってへんかったなあ、けん玉…」

D「なら、こんど持ってくるわ」

E「…そやなあ、ぼくも『こま』もしあったら、いま回したいなあ…」

B「こま、わたし、ようちえんでも回せた！」

E「…うん、だからぼく、一かいでも回せるようになりたいなあって、思ってた」

D「でも、こまやってるのなんか、見いひんよなあ」

B「ねえ、『カプラ』って知ってる？ こないだ、そのようちえんで、してはったんやって」

C「あ！ わたし、妹といっしょにしてきた」

A「おまえ…妹いて、えーなあ！」

B「カプラって、どんなん？」

C「口やと、ちょっと言いにくいかも…」

D「おれ、『ひねもす』やったら、知ってる。マジックハンドとかつくれんねん！」

A「おまえも、弟いてんなあ」

D「そう！」

B「わたしのとき、そんなん、なかったなあ…」

E「こんどまた、なんかで、しーひんのかなあ」

声（空に響いて）「A、B、C、D、E君よ…よ…」

全員「え？」

声「しかと聞いたぞ」

B（瓜生山の方を向いて）「あっちからするわ！」

C「しかもわたしの声にそっくりの！」

D「おれの声にもそっくり！」

声「その通り。おぬしたちに返しておるのはな、『やまびこ』なのじゃ」

全員「えー？」

やまびこ「さあ、今日からわしと、おぬしたちとの合言葉は、『やまびこ』じゃ。今日4時に、さっそくお山の幼稚園を目指すのじゃ。そこには新しい遊びが待っておる。一時間半なぞ、あっという間にすぎる遊びがな…遊びがな…がな…」（と言ってかき消える）

全員（顔を見合わせて）「…ほんとなんかなあ？」

## 2話「まえは『やまびこ』の日だったぜ」の巻

A「おまえ、先週の金曜日、こーへんかったやろう？」

E「え…なにが？」

A「…って、もう。しゃーないやつやなあ」

D「あ〜あ、せっかくおまえが楽しみにしてた〇〇で、遊んだっていうのに」

E「あ！ そっか！ 『やまびこ』があったんや…」

B「でも、まあ気にしない、気にしない」

C「また一ヵ月後、あるから」

E「がーん…」

D「でも、おれだって、うっかりするかもな」

A「そんなときはならさ、よし！ こうしよう。『お山へ行こうぜ』って、みんなが言うことにしたら！」

やまびこ（さて、どんなことになるか…。これからの楽しみじゃな。じゃが、やまびこならぬ、「やまび子」たちのために、ちょっとだけ紹介しておこう！）

### ○ 折り紙ヒコーキを飛ばそう！

むかし遊びはいつだってシンプル。思い出すのは、「よっしゃ！」と「ああ〜」という天と地ほどもちがう二つの気持ち。そのたびに何度もヒコーキをひろいに降りては、またジャングルジムを登って、期待に胸をふくらませたこと。そんな思い出とヒコーキを作りにおいで！

さあ、どんな形のヒコーキなら飛ぶかな？ 紙のかたさや折り方をいろいろ変えてみよう！

というわけじゃ。これから月末の金曜日は、

## 『やまびこ』の日！

そのときに、わたしの『やまび子』たちよ、お山の上で会おう…あおう…おう…。

## 「しぜん」だより 山下育子(しぜんクラス担当)

### 自然を思う――

私たちは毎日どれくらい自然を感じながら、二度と帰らない一瞬一瞬を過ごしているのでしょうか。

夜には月や星が私たちを照らし、その夜空を見上げて、遠く親の背で同じ月を見たことを思い出すふとした瞬間に、私たち大人も、傷つき疲れた心を癒してくれるものがすでに用意されていたことに感謝したい気持ちになります。そして、明日もまた必ず太陽は昇ってくれます。

また、多忙な日々、さまざまな試練が目前に立ちほだかり、生きている意味を問い直したくなるほどの日常に、小さなアリの黙々と自分より数倍大きな荷物をひたすら運ぶ姿を見つけた時、そこに自分と同じ魂を感じ、共感し、暫く時を忘れさせてくれる瞬間があるのは、自然を観る喜び以外の何ものでもありません。

また、人によっては花瓶に生けた花が、毎日少しずつ花びらを開かせ、香りをただよわせながら私たちに美しく語りかけてくれる様子を毎日楽しみにするのも、身近な自然を感じることに他ならないでしょう。

そして何より、「しぜんクラス」の子どもたちが、“宝物の石”“宝物の虫”を持ってきて得意げに話を交わしている時や、山の中で何かを見つけてワクワクした気持ちで自然と向かい合っている真剣な姿は、このクラスの子どもたちが最も輝いている瞬間に違いありません。

自然の中には私たちが生き物のひとつとして明日を生きるための、そして心身を癒してくれるためのエネルギーが蓄えられており、それを私たちは当然のように毎日享受して生きているのだと感ずることが出来ます。

そう思うと、子どもたちが、その生命力が溢れて心が輝いているはずの頃に、テレビ、ゲームの類に多くの時間を満たされがちで、言わば人工的な環境に心が浸され頭脳を不自然に動かすトレーニングに慣れてしまう一方、生身の人間との関わり、自然の偉大さを感じる心が成長しないまま大きくなることは、取り返しのつかない残念なことなのかも知れません。

私たち人間は、皆大いに自然の中を歩き、大人も子どもから多くを教えてもらい、不思議なものを見つけ、大人と子どもの枠を越えて自然を共有する気持ちを持ちたいものです。また、子どもたちにとっても、自然の感動をわかち合える大人の存在があって、その感動を心に刻んでいくことができるのでしょうか。

「しぜんクラス」は、毎回時間が足りないくらいです。そんな中で、ささやかな自然であっても、目で見、手で触れ、風の音、空気のおい、水の流れ、土の感触を忘れず、二度と戻らない自然の中に身を置く瞬間を大切にしたいと考えています。

### この1年間の「しぜんクラス」

#### 春・・・自己紹介

春探し (木, 花, 虫, 秋冬の落とし物)  
自然と遊ぼう  
ダンゴ虫, ワラジ虫のきょうそう

#### 秋・・・ヒマワリの種のおやつ

虫の声コンサート  
秋を描こう  
土の中の生き物  
ビデオ鑑賞「たね」  
紅葉, 黄葉の落ち葉さがし  
ぼうしはどれかな  
虫がつくったへんなもの

#### 夏・・・ひみつの森へ

種をうえよう  
クモの巣づくり  
雨の日の生き物さがし  
セミの声, 木にとまる虫  
沢ガニさがし

#### 冬・・・冬芽さがし

生き物はいつ生まれたの  
→古生代～中生代  
「三葉虫, アンモナイト観察」  
「ぼくのすきな恐竜」  
「わたしのすきな石」  
岩石と鉱物～花崗岩をもとめて  
「褐れん石」見つけた!  
銀閣寺山門の石畳  
薫青石ホルンフェルス観察,  
→大文字山2億年前の堆積層チャート,  
鴨川探索

#### \*\*夏のイベント

「ワクワク探検教室」瓜生山山頂  
(海拔 301m)～狸谷不動院へ  
～野鳥の声, キノコを見つける



# 『孟母』

福西亮馬（ことば、かず高学年担当）

京都は大学も多く、学問の町だと言われます。私はそれを大文字山の「大」の字から見下ろしたときに実感します。

私が数学を好きになれたのは、大学に入ってからのことです。これまでの勉強を見下ろして「あれはこっち」「それはあっち」と、有機的に位置づけられる思いがしたからです。しかし高校までは、息の上がる山道でした。好きではなくて、ただあきらめずについていく、という感じです。

私が高校の数学の先生に「何の科目が好きか」とたずねられて、上気して「数学が好きです」と答えたら、「君が？」と笑われたことを思い出します。あれは駄目だと思いますが、それでも、あきらめなかった原因は何かと振り返ると、それは小学生のころの思い出です。

自分からやる気を起こして解こうとした一題と、しばしばではないにせよ、母親に見てもらった宿題のことが思い当たります。

私には六年生の頃、図形の面積を求める問題で、「中学入試のだから」と、解けても解けなくても一向に構わず素通りした一題に、俄然やる気が出たことがあります。

そのころは放課後に「しっぽ取り」がはやっていて、私の好物の遊びでしたが、でもそれよりも、朝礼台の牢屋につかまっている間は、校庭の砂に、三時でも四時でも図を描いて解こうとしていた覚えがあります。

別に受験するわけでもなし、ただその興味を内に絶やすまい、だれかに先を越されまいという思いに支えられて、西日を気にしながら、また解けたらどんなにかすごいだろうという気がして、家に帰っても、空に覚えたその図形を宝の地図か何かのようにしてうなっていたものです。

結局それは解けずじまいで、何日か経ってからまた思い立っては考え、やはり解けず、あとでたった一本の補助線を見つければ解けたのだということを知ったのです。今でもその時の残念さと健闘ぶりは胸に蘇り、また自分からやり出した、ほとんど初めての「冒険」だったと知るのでした。

さて次は、母が見てくれた宿題のことです。あれは忘れもしない、そろばんの宿題でした。夕飯の支度が始まる前だったか、母と二人で、小さなテーブルで向かい合って、でも私は目の前に本を立てて、手元が見えないようにし、パチパチ言わせながら、実は後ろの解答を写していたのでした。そして「できた！」と言いました。

私はそろばん塾に通っていたので、学校の宿題としてのそろばんは、いまさらという思いがしたので、すぐに済ませる力はあるにしても、やる気がなかったのです。それで策を弄して時間を潰していたのでした。

今思い出しても、あの瞬間は不思議です。私には自信があり、母には直感がありました。早い「おしまい」にピンと来た母は、すぐに嘘を糺し、叱りだし、目に涙を浮かべたこと、母が宿題をせっかく見てくれていたのに、自分は申し訳ないことをしたのだと思ったことです。

母との算数の思い出はもう一つあります。文章題で、母は  $x$  を使った解き方を教えようとし、私は「学校で習ってへんやり方はしたらあかん」とがんばったことでした。我ながら、小学生は恐るべき保守派だと思います。結局これは母が根負けして、「なら自分でやりよし。せっかく解けるように教えてるのに」と、それっきりになったのでした。

これは駄目なやり方の例で、母が  $x$  を使わない方法を十分に教えられなかったせいでもあります。けれども、私の方もまた後になって、自分の頑固さを恥かしく思うので、それを思い出すたびに純化されて、宿題を見てくれた感謝だけが残りました。

結局中学に行っても、高校に行っても、大学に入るまで数学を嫌いにならなかった理由は、「孟母断機の戒め」ではないですが、こうした思い出の錦が断たれることをもったいなく感じたからでした。

私なりに今まで感じてきた勉強とは、次の二つです。一つは、自分で見つけた問題に情熱を持つこと。もう一つはその情熱を感謝に変えることです。

数学は古くからある学問なので、学校で習うことはいいも悪いもすでに道ができしており、順番どおりにやりさえすれば、自力で理解できるようになっています。山に分け入って、登山道とそうでない道とは、だいたい人が歩きもし整備もされているので、迷わないのと同じです。

しかし「まだ習っていない」から「まだしなくてもいい」というのは、学問的態度ではありません。しようと思えば、いくらでも先へ進むことができるし、またそうした道が実は用意されていることにも気付いてほしいのです。

塾に、あるいはこの山の学校に通ったら「教えてもらえる」という気持ちがあったのは駄目です。勉強はしてもらうのではなくて、するものだからです。私は五年生でも、六年生のことを自力で結び合わせ、中学生のことまで到達してくれるような人物を励ましたいのです。

リーマンはルジャンドルという人の書いた数百ページの数学書を、父親の目を「盗んで」、十代のときに読み通したといいますが。それで父親がその子の天分を認め、牧師の家系でしたが、数学を学べる大学に行くことを許したといいますが。

勉強は電気を消されたら、たちまち続けることはできません。そのように親の許しがなければ、できないものです。勉強はしてもいいと言われて、させてもらっているのです。

情熱と感謝、この二つの糸の縦横が、勉強という錦だと、私は思います。公園の砂場で、水道管の出現を口惜しいと思うくらい、とことん掘り抜く情熱がある一方で、晩には家に帰らなければなりません。家の人心配するからです。授業中に勉強の仕方が分からないから聞く、ノートの取り方を工夫することなどは必要なことです。ですがそれだけでは十分なことではありません。

自分からやる気を出し、そして学ぶ環境を与えてもらっていることを子も知り、親もそのことを伝えられるような工夫が、何より小・中・高校生において勉強の要だと思います。

(文・福西亮馬)